

飛山の由来は「とぶひや」か

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

鬼怒川に架かる柳田大橋から川越しに見える小高い丘を飛山という。鬼怒川に面した所は崖になっており、鬼怒川寄りからその丘の上には容易に近づけない。そうした地の利から鎌倉・室町時代には、ここに城が築かれた。

飛山城は、鎌倉時代の末の永仁年間(二九三〜九八)、真岡に城を構えていた芳賀高俊が築いたと伝えられる。その頃、宇都宮氏は貞綱が当主の時代であり、貞綱は元が襲来した弘安の役(二八二)で武勲をあげた功績により、戦後鎌倉幕府の要職である引付衆の一人に任じられた。このことから、芳賀氏が宇都宮氏との関係を密にするために、飛山城を築いたともいわれている。

ところで、宇都宮氏と芳賀氏の関係が文献上で確認できるのは、文治五(一一八九)年、源頼朝軍と奥州藤原氏が戦った阿津賀志山(現福島県

国見市)合戦の時である。鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』には、芳賀高親が宇都宮朝綱の家臣として益子氏とともに従い、戦功をあげたと記されている。以後、芳賀氏(本姓は清原氏)と益子氏(本姓は紀氏)は、紀清両党と呼ばれ、宇都宮氏の重臣として活躍する。

さて、芳賀氏と宇都宮氏は、ある時は姻戚関係を結びより強固な結びつきをする一方、内紛により敵対することもあった。しかし飛山城は、芳賀氏所領支配の根拠地および合戦において重要な役割を果たしたことに変わりはない。

飛山城が終焉を迎えるのは、天正十八(一五九〇)年七月である。豊臣秀吉は北条氏を破り小田原城を陥落させると、佐竹・宇都宮ならびに家来のものどもに対し、「いらざる城の破却を命じた。その時、飛山城は「破却」の対象となり、さらに慶長二(一五九七)年、宇都宮氏の改易に伴っ

て芳賀氏もここに滅亡したので、完全に廃城となったのである。

飛山城跡は、廃城後四百年を経た今日でも堀や土塁といった当時の遺構を残していることから、昭和五十二年国の史跡に指定された。

宇都宮市は平成四年度以降、飛山城跡公園整備のために発掘調査を行った。その結果城郭内から掘立柱建物跡や竪穴建物跡等が掘り出された。こうした発掘調査の中で、とんでもないものが出て来たのである。平成七八年にかけて、平安時代の竪穴建物跡が十二軒みつかり、その中の一軒から、「烽火」と墨書された須恵器の坏が全国で初めて出土したのである。

「烽火」は「とぶひや」と読み、「烽」は「のろし」、「家」は「施設」という意味であり、この場所が古代の通信手段の一つであるのろしを上げる施設であったことを示すといわれている。そして飛山の語源は、「ここが」とびのやま」であり、それが訛って「とびやま」になったのではないかの説もささやかれている。

飛山のある所は、火山灰が二〇メートル程も厚く堆積した台地上にある。鬼怒川の西方から見れば、小高い山にも見える。飛山の語源は、平坦地に山のように見える所ゆえ「飛び地」ならぬ「飛び山」とされ、それが地名の由来になったと考えられなくもない。それが古代ののろしを上げる施設が語源とすれば、中世の城跡にさらなる新たなロマンが膨らむのである。



烽火墨書土器
(宇都宮市教育委員会提供)



柳田大橋から
飛山城跡を望む